

新歴史の見える風景

阿曾隧道 福井最古のトンネル

産業発展の隠れた主役の一つ

敦賀市阿曾〜挙野間の



▲国道8号の黒崎隧道北側から捉えた阿曾隧道

静かに佇む現在の阿曾隧道。歴史の語り部としての姿を留めている。▶

国道8号を敦賀に向けて海岸沿いに南下し、阿曾集落を過ぎるとクシエードが見えてくる。注意深く観察すると、その海岸側に県内最古とされる「阿曾隧道」を垣間見ることがができる。

最初の隧道が穿たれたのは明治9年である。当時の敦賀県が、敦賀から杉津經由で北進する海岸道路（東浦道）を計画した際に建設された。当時、福井県は敦賀県として、敦賀に県庁が置かれ、県庁所在地を巡って福井と敦賀が対立していた。敦賀県にとって、最大都市である福井との交通網整備は急務であったのである。

その後、明治政府の改革により敦賀県は廃止される。福井を含む北東部は石川県へ、敦賀・小浜を含む南西部は滋賀県へと分割編入され、道路計画は一時中断したが、隧道だけは残された。この分割に対し福井側では激しい反発が起き、明治14年に至ってようやく現在の「福井県」が



設置された。

新県発足後の大きな課題は、荷車や人力車が通行できる「車道」の整備であった。すでに敦賀に鉄道は開通していたが、福井との陸路は依然として険しい木の芽峠越えの旧街道に頼っており、物流の大きな障壁となっていた。福井の産業発展には敦賀までの車道開削が不可欠であるとして、福井商法会議所（現商工会議所）は組織を挙げて運動を展開した。武生から海岸沿いに敦賀へ繋がる新道「春日野道」の建設を熱望したのである。

福井会議所のキャンペーンと寄付金募集の運動が実って、この道路は県、国当局に認可され明治18年8月に武生、敦賀の両端から工事が着工された。杉津以南はかつての東浦道を再整備することにあり、明治16年の大雨で崩落していた阿曾隧道もルートに組み込ま

れた。当時の資料によると、阿曾隧道は長さ51メートル、幅3・6メートル。坑門口（出入口）は石積みだが、内部は岩盤が堅固なこともあり素掘りのまま整備された。

明治20年、待望の春日野道が開通した。奇しくもこの年は、福井に羽二重織物の技術が伝来した年でもある。以降、羽二重の生産は燎原の火のごとく拡大し、福井は世界的な産地へと成長した。社旗を掲げ、羽二重を積んだ荷車が連日この道を往來し、福井経済の躍進を支えたのである。

明治29年に北陸線福井駅が開業すると物流の主役は鉄道へ移ったが、この道は長く幹線道路として機能し続けた。昭和34年に山側の黒崎隧道（延長97m、幅6・5m）が竣工し、現在の国道8号が整備されるまで、阿曾隧道は現役の国道として本県交通に貢献した。（文 奥山秀範）



竣工から時を経た大正期の姿（敦賀側より）▶



◀昭和34年竣工当時の黒崎隧道、右側に小さく交通標識と阿曾隧道が写る